

治験センター NEWS

2020年8月吉日発行

今回は臨床腫瘍科部長の三浦裕司先生に泌尿器腫瘍について伺いました。

➤ 泌尿器がんの薬物療法の変遷

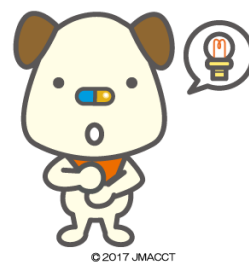
泌尿器腫瘍には、主に前立腺がん、尿路上皮がん（膀胱がん、尿管がん、腎盂がんなど）、腎細胞がんが含まれます。この10年程で、泌尿器腫瘍における薬物療法は、目まぐるしい進歩を遂げましたが、泌尿器腫瘍の薬物療法を専門とする腫瘍内科医は日本ではまだ数少なく、虎の門病院の泌尿器腫瘍チームは、治験を通じた新薬開発の分野でも積極的に活動しております。

➤ 前立腺がんにおける免疫チェックポイント阻害剤の開発

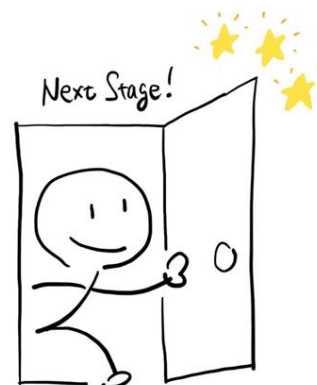
2018年に本庶佑先生とジェームス・アリソン先生が、それぞれPD-1、CTLA-4という免疫チェックポイント分子の発見の功績を認められノーベル賞を授賞しました。

この発見をもとに開発された免疫チェックポイント阻害剤は、腎細胞がんや尿路上皮がんにおいては生存期間を著しく延ばし、治療のブレイクスルーを引き起こしました。一方で、前立腺がんではなかなかうまくいきません。私が留学中お世話になっていたのはアリソン先生が運営する施設の一研究室でしたが、彼らは（アリソン先生自身が前立腺がんのサバイバーであった事も関係するのか）、前立腺がんに対するがん免疫療法の研究を盛んに行っていました。それは、前立腺がん自体に、免疫療法が効きにくくなるような何らかのメカニズムが働いているからと考えられています。そのメカニズムを克服するために、現在、複合免疫療法と言って、PD-1阻害剤に何らか別の薬剤を加える治療法が開発が進められています。

例えば、オラパリブというPARP阻害剤を併用する方法、エンザルタミドという抗アンドロゲン剤を併用する方法、ドセタキセルという抗癌剤を併用する方法などです。これらの薬剤は、それ自体でも前立腺がんに対する抗がん作用を持ちますが、それだけでなく、腫瘍の免疫状態を改善して、PD-1阻害剤の効果を引き出してくれるのではないかと考えられています。



©2017 JMACCT



（臨床腫瘍科 三浦裕司）

現在当院では、泌尿器腫瘍の治験 16 試験（内 前立腺がんの治験 4 試験）を実施中です。患者さんに効果が高く安全に使用できる薬をより早くお届けできるよう、皆様のご理解とご協力をお願いいたします。